ブラウン

2本のアルトリコーダーのための第4組曲

CDの演奏者

長谷川圭子（リコーダー）

石田誠司（リコーダー）

J. D. Braun

Suite No. 4

for 2 Alto Recorders

Players on CD

Recorder: Keiko Hasegawa

Recorder: Seiji Ishida

◆解説◆

前奏曲(プレリュード＝Prélude)とそれに続く４曲から成っています。初級のかたはPrélude → Menuetの順（またはその逆）で始め、あとは気に入った曲に進んでください。 休符以外のブレス（息つぎ）箇所をＶで示しましたが、必ずしもこれにとらわれる必要はありません。

Prélude Lentement　難易度 B1

Lentement（ラントマン）はゆったりと演奏する意味で、なだらかな動きで歌っていきます。

２小節目からたくさん出てくるなどにある + の符号は「t.」から来ていて「トリル」です。トリルとは、「ひとつ上の音（つまり「レのトリル」の場合ならミの音）とすばやく何度か交替して演奏する」という意味です。以下、トリルについての解説が多くなってしまいますが、初級のかたはトリルをせずに練習し、十分に慣れてから、少しずつトリルもこころみてください。

さて、たとえば第1リコーダーの2小節目の最初音では「シ」にトリルがついていますから、「シー」のかわりに「シドシー」あるいは「ドシドシー」ぐらいで演奏します。この間、もちろんタンギング（tuと発声するときの舌づかいで息を入れる）は最初の出し始めにするだけで、途中は息を入れ続けます。

なお、バロック時代の曲では、トリルを「ひとつ上の音」（ここの例では「ド」）から開始するのが原則ですが、場合によりけりで、この曲の八分音符についているトリルは、「音符の音」から開始するのもかなり有力だと思います。

Rec. IIの２小節や**Rec. Iの４小節**、**Re. IIの16小節**などにある「ラのトリル」は「ラシラー」または「シラシラー」と演奏しますが、正規指づかいだけでは難しいので、

([012356]→)[012345]→[01235]→[012345]

という指づかいがお勧めです。また、Rec. IIの７小節には、「ラ」の長い音符のトリルも出てきます。ここは「シ」から始めて「シラシラシラーーー」のように演奏しますが、やはり

[012356]→[012345]→[01235]→[012345]→[01235]→[012345]

という指づかいで。つまりはトリルの途中の「シ」の音を、正規の指づかいから６指（右手薬指）を省いた指づかいですませようというのです。こうしますと、「シ」の音は少し高めになってしまうのですが、バロック時代には、トリルの場合にはそういう感じがむしろ好まれたそうです。

Rec. Iの12小節に出てくる「ソのトリル」は、「ソラソー」と演奏するとして、

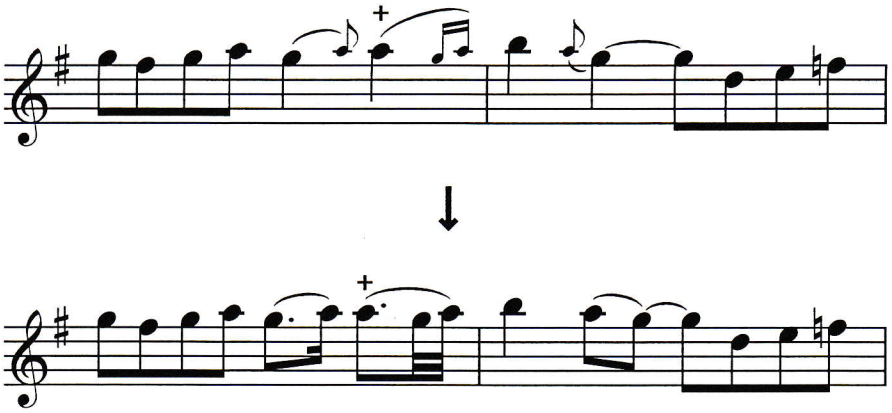
[245]→[2345]→[245]

という指づかいがあります。「ラ」から始める場合は[2345]から始めるわけです。このトリルは、ソが基音系の音であるのに「高いラ」は倍音系の音であるせいか、ピロピロいうような独特の味があります。

Rec. IIの12小節にある「ミのトリル」は、「ミ」と「ファ#」との素早い交替です。「ファ#」の

指づかいとして［0］（つまり左手親指だけをふさぐ）を用いると演奏できます。「ミのトリル」は、少し長いのが**Rec. Iの13小節**にも出てきます。

Rec. Iの15小節の「ミのトリル・ナチュラルつき」は、本当ならば「ミ」と「ファ」の交替です。「ファ」から始めるなら、[02]→[01]→[0]→[01]とします。「ミ」から始めて短いトリルですませるときは[01]→[0]→[01]です。つまり、ここでも「ファ#」（の替え指音）が「ファ」のかわりに一瞬だけですが用いられていることになります。



さて**Rec. Iの17～18小節**のような、小さな音符（装飾音符）を使った箇所をどのように演奏するかですが、CDでは右図のように演奏しました。つまり、

(1)「後打音（こうだおん）」のついた四分音符は付点八分音符として演奏し、後打音そのものは、その拍内の残りの時間で演奏する。

(2)前打音には音符通りの音価を与え、親音の時間内におさめる

というわけなのですが、言葉にすると難しいようでも、CDをききながら楽譜を見比べていただけば、きっとわかっていただけると思います。同じパターンが**25小節**にも出てきますので、同じ処理で演奏してください。

Musette en Rondeau　難易度 B2

「ロンド形式によるミュゼット」です。「ミュゼット」はもともとバッグパイプの一種である楽器の名ですが、転じて、素朴な感じの舞曲の名に使われることもありました。「ロンド」は楽曲形式で、主要主題（ロンド主題）のあと、副主題、また主要主題、また別の副主題、また主要主題‥‥というように、副主題をはさみながら主要主題（ロンド主題）を何度か繰り返す形の曲です。

この曲で言いますと、1～16小節で示されるのがロンド主題です。17～32小節が第一副主題、49～64小節が第二副主題、81～96小節が第三副主題ということになるでしょう。

1～3小節に「ラ」のトリルが出てきます。これについては第1楽章で解説しましたので、そちらを参照してください。回数的には、この曲の四分音符トリルはいずれも2回（「シラシラー」など）で、きるだけピリッと効かせると音楽が生き生きするでしょう。これに対して二分音符のトリルは、たとえば**Rec. Iの8小節**にありますが、これは3回（「ドシドシドシー」）か、4回（「ドシドシドシドシー」）ぐらいを、少しおもむろに始めてしだいに速くなるような気持ちで行いましょう。

32小節のように付点二分音符にトリルがついているのは、フレーズの終わりの音を強調するような気持ちのトリルですが、具体的な要領としては二分音符のときに準じてください。

Rigaudon　難易度 B2

「リゴドン」は二拍子系の速い舞曲です。ただCDではそれほど速いテンポは採用していません。

「第1リゴドン」は、軽く弾むように、歯切れ良く演奏してください。トリルも「2回」で十分ですが、ピリッとした速いトリルが理想です。

これとは対照的に、「第2リゴドン」は、暗い短調が基調になるのもあり、少しやわらか目に演奏してみましょう。「シャープひとつ」から「フラットひとつ」に調号が変わっていて、原則として「シ」が♭の音になりますから注意してください。（「ト短調」なので、現代の記譜法なら「フラット二つです」が、バロック時代にはこういう表示がよくありました。）第2リゴドンが終わったら、もう一度第1リゴドンに戻り、今度は繰り返しをせずに演奏して、終わります。

Gigue　難易度 B3

「ジーク」は8分の6拍子か8分の12拍子で書かれることの多い、速い舞曲です。この曲にもあるように、3つ並ぶ八分音符は最初の二つをグループにしてスラーでつなぐようなノリで演奏されることが多いようです。ここでも第1ジークはとくに歯切れ良く、第2ジークは少し柔らかく演奏してみましょう。

第1ジーク、**Rec. Iの7小節目**「ミのトリル」は「2回」で十分で、[12]→[01]→[0]→[01]というのが最も本格的な指づかいだと思います。

第2ジークは「ト短調」になり、第1リコーダーに「ミ♭」がかなり何度も出てきます。この音が出てくると指がもつれやすいので、指に力が入ってこわばらないように気をつけながら、ゆっくりと練習を繰り返してください。

Rec. Iの7小節目の「ミ」のトリル（ミとファの交替）は、第1楽章の15小節で解説した指づかいです。また**Rec. Iの12小節**「ソ」のトリルは、第1楽章の12小節で解説しました。

第2ジークの最後にダ・カーポ（最初にもどる）の指示がありませんが、当然に、第1ジークに戻って、繰り返しなしで第1ジークを演奏して終わります。

Menuet　難易度 B1

「メヌエット」は3拍子系の宮廷舞曲です。「低いファ♯のトリル」をはじめ、トリルを利かせながら演奏するとなるとなかなか難しいのですが、初級のかたはトリルをすべて省いて練習し、全体がよく演奏できるようになってから、少しずつ挑戦してみてください。

それでは、解説は以上です。どうぞお楽しみになれますように！